「二瘤のらくだ」では困る
－－ 日米の先生のお話から －－

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA　顧問　教育アドバイザー
張江　幸男

アメリカの高校の先生のお話と、日本の受け入れ校の先生へ調査からの、
海外での子どもの教育への具体的なアドバイスを、まとめてみました。

【1】現地校を訪ねて

昨年、ロス・アンゼルスのある高校を訪ねた。A校長先生のお話の最後に、これから渡米する方にぜひ伝えてくださいと、次のことを強調された。

日本人が入学してくるようになったのは、この地域では30年くらい前からだった。いろいろな外国人の子弟が沢山入ってきたが、日本人の子弟について、自分も他の先生方も特別の関心をもった。

それは日本人の異常なまでの勤勉さだった。私の初めて教えた子供は9年生だったが、教室の中で飛び交う英語を全く聞き取れなかった。それでも、必死になって聞き取ろうと努力し、特に書く学習はアメリカ人の子供より、正確に書こうとした。たとえばスペリングコンテストなどは、3か月もたつと上位の成績をとるようになった。

その陰には親の力強い援助があった。早く英語力を付けるために、先生方に助言を求め、いろいろな工夫や努力をしていた。その上、親は学校のボランティア活動にも協力を求めると喜んで参加してくれた。PTAのある役員は、日本人の母親は多くの活動に積極的に参加してくれるので大歓迎だと話していた。

ところが、最近は大きく様子が違ってきている。A校長先生の観察では、大きく分けて二つの層になってきたと、次のように分類していた。

【2】上層の親

親が帰国子女であったり、留学経験者であったり、帯同赴任にあたって適切な助言を得てきた親たちである。彼らの多くは、日本にいても子どもの教育に熱心に取り組んできた親たちである。

彼らは夫婦で子どもの将来を見据え、共通した教育観を持っている。現地での生活にも積極的に入り込み、子どもにも異文化に触れさせる。学校の教育内容や教育方法にも強い関心を持ち、子どもの学習にも両親で援助する役割を分担して、継続的に熱心に活動している。

ある母親の例だが、彼女は家政学部の出身で英語は必ずしも得意ではなかった。だから、この際、子どもと一緒に英語を学んでいこうとした。たとえば、子どもがテキストで分からないところには付箋をつけさせた。翌日、彼女はすべての付箋に辞書をひいて彼女なりの訳文を書き続けた。2年後には高校のテキストはほとんど理解できるようになった。3年目には子どもも英語力が付いたので、彼女は大学に通い、米文学を学んだ。更に2年後には、大学院で外国人に英語を教える講座に通い、帰国までに資格を習得した。

更に若い母親の例だが、低学年の先生に頼まれ、子どもが本を読むのを聞いてやる、というボランティアを頼まれた。彼女はただ聞き流すのではなく、どのような相槌や効果的な感想を述べたらいいかを工夫した。先生にも助言をもらい、子どもたちに非常に喜ばれるようになった。その上、子どもに本を読み聞かせる大学の講座に通い、その学校の多くの先生から依頼をうけるまでになった。

当然このような親の子どもは学力も伸び、クラスでもリーダー的存在になった。彼らは日本に帰国してからも、頻繁に便りをくれるが、日本でも有数の大学に進んでいる。

【3】困った層

この層の親は、ある意味で無責任な情報を信じた親子たちだ。今では、日本の各地にも海外から帰国した人たちが多数いるようになった。このような既体験者は、これから海外赴任する人たちに、助言を求められた時、自分や子どもが必死に学んだことを。、手柄話のようにとられることを危惧し、いやーたいしたことじゃないですよ、とか。まあだれでも、そこに入ればなんとかなるものですよ。などと楽観的な言葉で、必要なことの一部分しか助言しないことである。行けばなんとかなる。この言葉は禁句である。

親は学校や先生の指示を理解しようともしない。当然、学校行事への参加や、ボランティア活動にも参加しない。